

ボトルワインの輸入について

●ボトルワインの輸入量は例年11月が最多

気温が下がり、今年も新酒が出回る時季となりました。11月16日には、毎年の風物詩となっているボジョレー・ヌーヴォーの解禁が行われます。

この影響で、成田・羽田空港のボトルワインの輸入量は、例年11月にピークを迎えますが、昨年も同様に11月の輸入量が特に多くなりました。

今回は、東京税関の特集資料「ボトルワインの輸入」から、2016年のワインの輸入についてみていきます。

●輸入量・輸入額ともに減少

全国でのボトルワインの輸入量・輸入額の推移をみると、1998年を頂点に堅調な推移を続け、2012年から微増を続けています。

しかし、2016年の輸入実績は、2015年と比べて輸入量が17万2,395KL(前年比92.9%)、輸入額が993億円(同87.0%)と、輸入量・輸入額ともに前年を下回りました。

運送形態別では、毎年11月に航空貨物の輸入量が増えますが、これは主にボジョレー・ヌーヴォーの輸入によるもので、解禁日に間に合わせるべく航空便で輸入され、この月だけ空港での輸入が増加するためです。

また、2016年の国別輸入量の構成比についてみると、成田空港ではフランスが78.0%、羽田空港でもフランスが96.0%であるのに対し、東京港ではフランス27.4%、チリ23.7%、イタリア23.1%、スペイン11.9%となりました。

●手頃で美味しいチリ産ワインの人気に陰り

主要国別に輸入額・輸入量の推移をみると、輸入量ではチリ産が首位となりましたが、輸入額では依然としてフランス産が首位であり、総輸入額の42.8%を占めています。

ボトルワインの原産国は、長年にわたりフランスが最

も多く、1998~2014年まで数量・金額ともフランスが連続して首位となっていました。2015年に輸入量でチリ産がフランス産を僅差で超えました。

その背景には、チリ産ワインが低価格で品質が安定していること、国内での認知度が高まったこと、経済連携協定(EPA)により税率が低いことなどがありました。2016年はチリ産ワインの輸入量が前年比98.0%と減少しました。

要因としては、それまで安定した品質と低価格でワインブームを牽引してきたチリ産ワインですが、最近は各社が1本(750ml)500円程度の格安チリ産ワインを販売するなど、価格競争の激化で品質とのバランスが崩れ、消費者が離れたとの見方があります。また、国産ワインの品質が向上し、国産を選ぶ人が増えたことや、缶チューハイなど他の酒類との競合も影響しているとみられています。

●東京・横浜港の2港で7割弱

全国の主要港別の輸入量については、東京港が全国の輸入量の42.4%を占めて首位であり、次いで横浜港が25.3%で2位となりました。大きな消費地である首都圏を抱える東京港と横浜港で67.7%を占めていることとなります(2016年実績)。

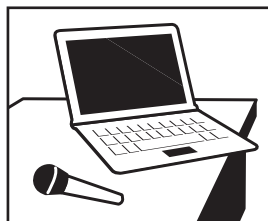
全国の主要港別輸入量を月別にみると、やはりボジョレー・ヌーヴォーの影響で、毎年11月に成田空港、関西空港、羽田空港など、空港でのボトルワインの輸入が増えています。

より詳しい情報については、東京税関のホームページ(<http://www.customs.go.jp/tokyo/content/toku2909.pdf>)から「ボトルワインの輸入」全文がご覧いただけます。また、資料内容に関するお問い合わせは、東京税関調査部調査統計課(03-3599-6385)までお願いします。

COFFEE BREAK

カラオケ店がビジネス空間に

そろそろ忘年会シーズン。宴の二次会によく使われるカラオケ店ですが、昨今、あの空間を会議や資料作成など、仕事のスペースとして活用するビジネスマンが増えています。大手企業が平日昼間のニーズが少ない時間帯に会議室として貸出したところ、順調に売上が伸び、他店も相次いで参入。一般的な



貸会議室は少人数では割高なことが多く、また、喫茶店では周囲の騒音や情報漏えいのリスクも。一方、個室のカラオケ店ならこれらの問題を一気に解消。さらに、通常、カラオケ店は駅から近いというのもメリットです。発想の転換による新サービス。仕事が上手くいけば一曲披露となるかもしれません。